

無銘

表紙の人
江橋節郎

もとより座右銘などというものはもち合わせないが、六十余年これといった信条もなく生きて来た私には、それに代わるべきものもない。いろいろと原稿の依頼は受けて来たが、恐らく今までに課せられた最大の難題といってよい。たしかに警句らしき言葉を口にすることはある。しかし、それは飽くまで相手を意識し、揶揄しようという下心のある場合である。頭のよくきれる勉強家に「研究とは、何よりもまず肉体労働だ」などといい、ぬくぬくと育ち、自信に満ち溢れた秀才に、人生は「運」「鈍」「根」そして「貧」などと古くさいことをいつてみる類である。平たくいえば嫌がらせである。それは座右銘には程遠い話である。

たゞ私は「貧」ということは人間にとって、少なくとも研究者にとって、大切



といってしまうばそれまでであるが、そうだとすればそれは人間に関する壮大な実験であり、ある意味でのユートピアの出現であった。人々はものごとを素直に考え、希望に燃えて働いた。これを支えたのは「貧しさ」だったと思う。研究というものは、本来子供っぽい、無邪気な所業である。世慣れた、したり顔の大人にできることではないのだ。それが経済の繁栄——それは、そういう状況下のひたむきな努力が実った結果ではあったが——とともに心からも「貧しさ」が失せ、ものわかりのよい、しかも尊大な日本人になって来た。

いまこゝで、この三十余年——それは生物学の爆発的發展にまさに対応している——が日本人にとって何であったのかを、真面目に考え直す必要があるのではないか。

岡崎国立共同研究機構生理学研究所 教授 神経化学部門

日本学士院会員